

佳作

きつと頑張れる

宮城県 仙台市立中田中学校三年 菅野 倫太郎

「怪我をすることは誰にでもできることではない。一番自分と向き合える時期だから大切にしなさい。」先生のこの言葉に私は救われた。

私は陸上競技部に所属している。種目はハードルだ。二年生の県新人で四位に入賞し、強化指定選手に選考していただいた。しかし、その喜びもつかの間。私は腰を怪我をしてしまった。本当に致命的な怪我だった。最初のうちは、いつか治るだろうとそのままにしていたが、腰の状態はどんどん悪化していき、歩くだけでも痛くなるくらいだった。そこからは身体の調子と共に心の調子も崩れていった。

約一カ月たった強化練習会ときだった。私はハードルを跳べずに、ずっと他の選手の動きを見たり、ハードルを並べるのを手伝っていた。他のライバル選手の動きをずっと見てみると、自分だけ置いてか

れているように感じた。どんどん私の心の中で不安や諦めの気持ちがあふくらんでいった。

運悪く怪我は想像以上に長く続いた。目の前で練習している選手を見る度に辛くなっていった。しかし、その時ハードルのコーチの先生にこう言われた。「怪我をすることは誰にでもできることではない。

一番自分と向き合える時期だから大切にしなさい。」この言葉を言われた時から私の見る景色が少しずつ変わっていった。

その日から私は、練習では自分のできることを全力でやり、挨拶や準備も人一倍やるようにした。

「ここだけは、絶対誰にも負けたくない」という気持ちで一生懸命にやった。もちろんライバル達が走っているのを見ることは本当に辛かった。だが、私は自分を信じて「自分のできること」というのを全力で探し、実行していった。常にプラス思考で「自分ならできる」と信じた。すると、しだいに怪我の具合も良くなっていき、走れるようになってきた。そしてシーズン直前にはほとんど完治するまでになっていたのだ。そして迎えたシーズン初レース。その大会で私は、わずかながらも自己ベストを更新することができた。その時は本当に嬉しかった。

私はこの悪夢のような「怪我」という経験から希望を学んだ。いつどんな時でもどんな状態でも、自分にできることは必ずある。自分としっかり向き合いたい探し続ければ、成長の糸口は必ずどこかにあるのだ。これから先、もっと辛いことがあったとしても、私は「きつと頑張れる」と思えたあの瞬間を一生忘れない。顔を上げて周りをよく見れば、絶望的な世界でもきつと違って見えてくるはずだから。